

英語慣用句の通時的研究
— go the whole hog の軌跡 —

伊 藤 一 正

北海道情報大学

A Diachronic Study of an English Idiom
—Following the Track of “go the whole hog” —

Kazumasa ITO

Hokkaido Information University

平成27年11月

北海道情報大学紀要 第27巻 第1号別刷

〈論文〉

英語慣用句の通時的研究

— go the whole hog の軌跡 —

伊藤一正*

A Diachronic Study of an English Idiom
—Following the Track of “go the whole hog”—

Kazumasa ITO*

要旨

本稿は、英語慣用句“go the whole hog”の通時的変化を調査するものである。その発祥の国と時期、定冠詞が消失した国と時期、変異型の種類、そして現在のこの慣用句と変異形の使用頻度について、2種類の大規模コーパスの活用と並行して文献による調査も行った。その結果、この慣用句は米国が発祥地である可能性が高く、また定冠詞の消失も米国で起こった現象であること、さらに英国では現在も定冠詞を付けて使われるが、米国においては定冠詞が省略された形が同程度の使用頻度であることが確認された。また、変異型は現在、廃語寸前の使用頻度であることも確認されたが、19世紀にほぼ同時に出現しているため発祥国は特定できなかった。

Abstract

The purpose of this paper is to explore the diachronic change of the English idiom “go the whole hog.” Conducting literature research along with using two large-scale corpora, the author examined the country and period in which this idiom and its variants had originated and its definite article had disappeared. Variant types of this idiom and their present frequency of use as well as that of the original “go the whole hog” were also examined. The result showed that “go the whole hog” most probably originated in the United States, where the disappearance of the definite article occurred afterward. It was also found that “go the whole hog” is predominantly used in the United Kingdom whereas in the United States, “go whole hog” is used equally frequently. As for variants of this idiom, the research result showed that they originated almost simultaneously in both countries in the 19th century, and that they are on the verge of extinction.

キーワード： 慣用句 (idiom) 通時的変化 (diachronic change) コーパス (corpus)

*北海道情報大学情報メディア学部准教授 Associate Professor, Department of Information Media. HIU

1 はじめに

本稿は、英国と米国で共通に使用される慣用句の中で、誕生から現在に至るまで大きな変化を遂げた慣用句を英国の小説 *Harry Potter* から取り出し、その発祥から変異型、冠詞の消失、使用頻度などについて変遷の歴史を探ろうとするものである。

具体的には、「徹底的にやる」を意味する *go (the) whole hog* について、その誕生から冠詞消失の時期、変異形の種類と出現の時期、さらに英国と米国における現在の使用頻度を調査する。

このように英米両国の慣用句の差異、特に米語が英国に与えた影響を追跡する研究を松田(1985)が、慣用句については文献調査と英語母語話者に対するアンケート調査で、また単語は当時使われだした語数 100 万語のコーパス(corpus)を活用して行った[1]。慣用表現の通時的な研究としては、Uchida(2014)が *at the end of the day* の意味変化について 6 つのコーパスを駆使して調査している[2]。

2 調査方法

変遷の流れを調べる上で最初に行うべきことは、初例がいつなのかを特定することである。伊藤(2015)が示したように[3]、現在の使用頻度を調べる上で大規模コーパスは極めて有用である。しかし、ある慣用句の初例を調べるためには各種大規模コーパスと *Oxford English Dictionary* (以下、OED) などの初例の時期を記載している辞書、あるいは実際に発行された書物との比較も必要になってくる。今回の調査では、複数の慣用句の出現時期をグラフで同時に可視化できる唯一のコーパスである *Google Books Ngram Viewer* (以下、GBNV) を使って慣用句 *go the whole hog* の

大まかな変遷の流れを把握し、その後辞書や文献などでさらに詳しく調べた。また、必要に応じて他のコーパスも補完的に使用した。

2-1 GBNV のグラフが示す初例の正確さ

GBNV の初例を示す正確さを見るために、小説 *Harry Potter* 全 7 巻の中で使われている慣用句で、OED が米国発祥(orig. US) と記述しているものを検索窓に打ち込み、米国における出現時期が英国より早いかどうかを確認した。以下は、この小説に出てくる OED が米国起源としている慣用句を一覧にしたものである。

- ① *bite off more than you can chew*
- ② *chicken out*
- ③ *get a move on*
- ④ *close shave*
- ⑤ *close call*
- ⑥ *tip off*
- ⑦ *this neck of the woods*
- ⑧ *double take*
- ⑨ *double talk*
- ⑩ *get the hang of it*
- ⑪ *spill the beans*
- ⑫ *you're history*
- ⑬ *search me*

GBNV で①と⑦をグラフ化すると、図 1 と 2 のように明確に米国での出現が英国より時期的に早いことを確認できる。青線が米国、赤線が英国で 2012 年までに発行された出版物でこの慣用句が使われた様子を表している。縦軸はそれぞれの国における使用頻度を表す。折れ線の右側に、実際に検索窓に打ち込んだ文字列が示されている。文字列は米国の場合は(検索する慣用句:eng_us_2012)、英国は(検索する慣用句:eng_gb_2012)(以下、同じ)である。

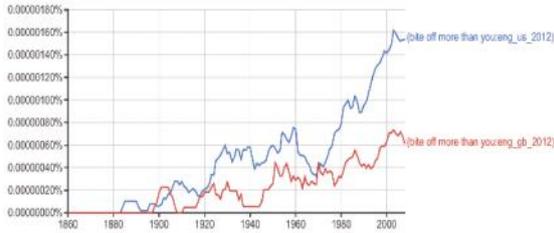


図1 bite off more than you (can chew)の比較

GBNVは5語までしか打ち込むことができないため、bite off more than you と打ち込んだが、出典がその後ろに can(could) chew を伴っているのを確認している。

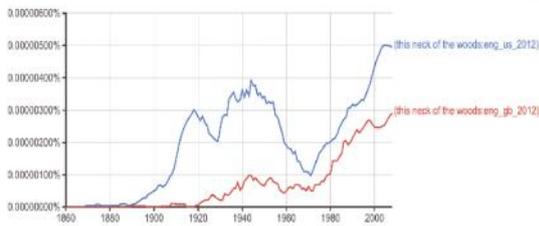


図2 this neck of the woods の比較

このように、明確に米国語法として使われ始めたとグラフ上で判断できるのは、調べた慣用句13例の中で10例であった。上記以外の8例のグラフは資料を参照されたい。この調査で分かったことは、少なくともGBNVにおいては、初例の年代が古くにさかのぼるにしたがって、初例の出現時期が判別しにくくなることである。しかし、GBNVの説明にあるように、19世紀以前に英語で発行された書籍は合わせて50万冊という数であり[4]、当然、年代がさかのぼればGoogle Booksが所有する書籍の数も少なくなり、正確な出現時期を特定することは困難になる。GBNVでは19世紀中盤以降の初例の時期についてはかなり正確に抽出できるが、それ以前になると文献を調べたり、他のコーパスと比較する必要性が出てくる。

次は時期を特定できなかった例の1つである get the hang of it のグラフである。

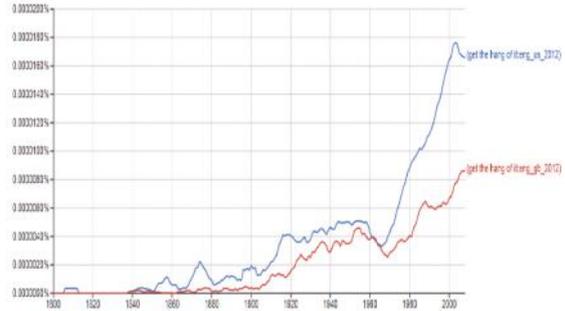


図3 get the hang of it の比較

1810年ころに1つの山があるが、その出典を調べると、それに相当する書籍が示されておらず、その次の1840年ころの山は青線(米国)と赤線(英国)が重なり合っている。このようにグラフ上では初例が英国と米国のどちらかが明確にできないケースが、close shave, double talk (資料参照)とあわせて3例あった。なお、search me は文字通り「私(の身体)を捜してごらん。何も出ませんよ。」といった意味が用例に含まれるため、同じ意味の You can search me を打ち込んだ。また、chicken out は the hen breaks the egg and lets the chicken out といった使用例が混ざるため、「おじけづく」の意味を表すため過去時制で打ち込んだ。

3 go the whole hog

3-1 表す意味

この慣用句の出現は19世紀初頭にまでさかのぼる。「豚一頭(the whole hog)を丸ごと食べる(eat up)」という表現から転じて「極端に走る、とことんまでやる(リーダーズ英和辞典)[5]」という意味を表すようになったと推測できるが、OEDの記述もそのことを示唆している[6]。

1841年に発行された英国の小説にも、この慣用句の変異形と思われるが表現 go it the whole hog を見ることができる。

(1) This furious thrust was, however, not only admirably parried by Playfair but the blade of Boon's sword was turned off shivering in the air and the pointer of Playfair's was planted against Boon's chest so closely and surely, that the life of the latter was completely at Playfair's disposal. He gallantly spared it, on account of Boon's ignorance of fencing. Saying "I conclude the meeting will now terminate, for I have full satisfaction." "No, by the 'tarnal! We'll **go it the whole hog,**" roared Boon^[7]. (太字筆者, 以下同じ)

フェンシングによる勝負に負けても、「いや、(どちらかが死ぬまで)徹底的にやるんだ」と敗者が叫んでいる場面である。

この意味合いは現在も変化していない。次の例は、ある人物が自分の性格を述べている一文であるがこの慣用句の持つ意味合いがよく表現されている。

(2) I personally hate compromise. It doesn't go with me, with my character, with my way of doing things; it doesn't fit, it is not me. If I want to do something, I do it, and if not, I leave it; but if I do it, I do it in full. I **go the whole hog**. To the bitter end. No half way. No weak measures. No fifty-fifty. Cut your ladder and burn your boats. Don't leave loopholes^[8].

妥協をせず最後まで徹底的にやり通すという強い意志・態度を読み取ることができる。小説 *Harry Potter* では次のような場面で使われている。

(3) 'We'll need to practice Disappearing together under the Invisibility Cloak, for a start, and perhaps Disillusionment Charms would be sensible too, unless you think we should **go the whole hog** and use Polyjuice Potion? In that case

we need to collect hair from somebody. I actually think we'd better do that, Harry, the thicker our disguises the better...' ^[9].

「変身薬を使って徹底的にやらないのであれば、透明マントなどの他の術を使ったほうが…」という意味合いで、やはり「徹底して最後までやる」というニュアンスが醸し出されている。

3-2 発祥

この慣用句は英国発祥かそれとも米国発祥なのかを調べるため、GBNV にそれらをすべて俯瞰できるようなグラフが現れるように打ち込んだ結果が次の図 4 である。

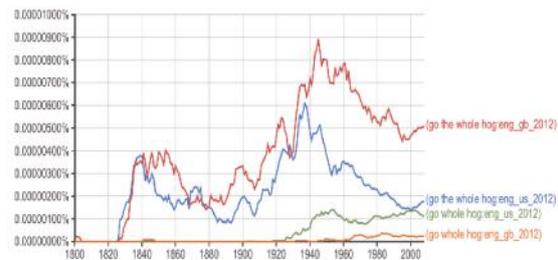


図 4 go (the) whole hog の変遷

米国における go the whole hog の推移が青色、同じく英国における推移が赤色、さらに米国における go whole hog の推移が緑色、そして英国におけるそれが橙色で示されている。前述のとおり書籍の発行部数の少なさから、19 世紀前半以前の初例の特定は困難なことが多い。この図から 1920 年ころ米国において定冠詞が消失したことを明確に見て取れる。しかし、go the whole hog の出現は 19 世紀初頭であること以外、英国と米国のどちらが先であるか明確には判別できない。

英国の新聞 the Guardian(電子版 October 8th, 2010)は掲載したコラムで、根拠は示していないが get the hang of it と並んで go the whole hog をアメリカ語法(Americanism)の例とし

て取り上げている^[10]。

また、OED はこの慣用句を米国起源としてはいないが、1870 年に米国人著述家 George Ticknor Curtis によって書かれた米国人辞書編纂者 Daniel Webster の伝記の中で、1828 年 1 月にこの慣用句を Webster が手紙の中で使用したことが記されているのを初例としている。以下はその手紙の抜粋である^[11]。

(4) “He will either go with the party, as they say in New York, or go **‘the whole hog’** as it is phrased elsewhere, making all the places he can for his friends and supporters, and shaking a rod of terror at his opposers.”

しかし、実はこれより以前の 1823 年に米国の詩人 Samuel Woodworth により使用されていた事実を Corpus of Historical American English (以下、COHA) から抽出することができる^[12]。

(5) The best prescription is a roar of laughter: One hearty laugh, no matter how excited, May save a life when every hope is blighted. T is true, Placide has got an epilogue, But taint the thing—it don’t **“go the whole hog;”** So, while he’s back there, spelling out each line, I’ll give you an extrumpety of mine; Original throughout—no one has read it^[13]. (原文のまま)

次に文献を調べていくと、1929 年に米国で発行された *The Cabinet of Institution, Literature, and Amusement* の中でこの慣用句が使用されている。

(6) In a town not forty miles from Hallowell, there lived a decent but jealous weight who was famous for **“going the whole hog”** on the federal side, being particularly devoted to the interest of

Gov. Strong ^[14].

また、1833 年に発行された英国人 Thomas Hamilton による米国旅行記 *Men and Manners in America* において、“I learned that **‘going the whole hog’** is the American popular phrase for Radical Reform, and is used by the Democratic party to distinguish them from the Federalists[...]^[15]” と記されており、この慣用句が米国語法であると述べている。

さらに、英国で書かれた書簡集の中に、“you Bath people appear to be all Radicals and **go the whole hog** as they say in America”^[16] という 1836 年当時の記述が残されており、この慣用句が米国語法と認識されていたことが伺える。

3-3 定冠詞の消失

図 4 から、go the whole hog の定冠詞の消失は 1920 年ころ米国で始まったことを看取できる。しかし、こうした慣用句の多くが俗語表現として誕生し、一般的に使用され書籍に登場するまで時間差があることを考慮しなければならない。Flexner (1982)はそのことについて次のように記している。

(7) All such dates for the earliest known use of a word or expression can, however, be deceptive: many older terms entered the spoken language years before they were recorded, and many others have probably appeared in earlier writings where no researchers has yet found them^[17].

このことを裏付ける書籍からの引用を 2 例、次に記す。

(8) Like prudent investors, the brothers did not **go "whole hog"** (an Americanism that amused foreigners of the time) but risked little upon their venture ^[18].

これは米国 New York 市で現在も営業しているレストラン Delmonico's の創立者について 1935 年に出版された書籍の中の一文である。この店は 1820 年代に兄弟によって始められ、この文はその兄弟の経営に対する姿勢を表している。無理な投資をしなかったようであるが、それを(not) go whole hog で表している。そして、この慣用句を当時の外国人たちが興味深く聞いていたことを書き添えている。(ただし著者が go the whole hog と記すべきところを go whole hog と記述した可能性は残る。)

もう一例、1841 年に英国で発行された米国を舞台とした小説 *Playfair Papers* の中では go the whole hog と go whole hog の両方が使用されている。

(9) "Citizens, for governor and members of both houses there must in my consideration be one whole-hog opinion for candidates — that, I calculates, is to **go whole hog** for whole of disputed territory, and in taking the census to add up all Madawaska settlement to State of Maine population; then I consider if the hero of Tippecanoe, that be'es General Harrison, **goes whole hog** for disputed territory, then State of Maine will conclude on him for president"^[19].

(10) The conduct of the President was then approved; and to **go the whole hog** and to war, if not to be had without war, for the whole of the disputed territory was agreed to as the *sine qua non* principle of voting^[20].

3-4 定冠詞の有無に関する辞書の記述

小説 *Harry Potter* の米国版はこの慣用句を定冠詞がない形に変更を加えていない^[21]。これは図 4 から看取できるように、現在の定冠詞のある場合とない場合の使用頻度が大きく差がないため、米国の編集者が敢え

て変更しなかったと推測される。

しかし、近年日本で発行された辞書には go (the) whole hog と記述するケースが多い(リーダーズ英和辞典^[22], ランダムハウス英和辞典^[23])。英国で発行された辞書は go the whole hog のみ記載するもの(Macmillan English Dictionary^[24]), go whole hog をアメリカ語法として記述するもの(Longman Dictionary of Contemporary English^[25])の両方がある。米国発行の辞書、あるいは英国発行の米国のイディオムを扱った辞書では、通常定冠詞は省かれるとするもの(The American Heritage Dictionary of Idioms^[26])と定冠詞がない形のみを記載しているもの(Cambridge Dictionary of American Idioms^[27])がある。OED に go whole hog の記載はない。Go to the whole hog という形も記述しているが誤記である可能性が高い。

4 変異型

4-1 go the whole hog or none 及び go the whole hog or nothing

1870 年に英国で発行された俗語辞典に、go the whole hog と並んで、the whole hog or none という表現が記されている^[28]。下記の例(15)のように go the whole hog or none として使われる場合と、the whole hog or none が独立して名詞として使用される場合がある。また、ランダムハウス英和辞典には同じ意味の the whole hog or nothing が記載されている^[29]。

(11) Mama said, "When a man want to marry you, he's got to take you **whole hog or none.**" Don't let him sample the goods or parcel you off until he makes up his mind^[30].

男性が自分と結婚したいなら、(結婚) するかしないかのどちらかで、品定めをさせ

てはいけない、と母親が娘に言い聞かせたという内容である。ここでは副詞として使われている。

(12) Once I decide to do something, it is **whole hog or nothing**. I was really anxious. My gears were in motion. I ran into the house and flew up the stairs to my room. Tearing through closet, I was frantic to find anything to make a loincloth out of^[31].

例(12)は一度やると決めたら、とことんまでやるか、全くしない自分の性格を表している。ここでは名詞として使われている。

この2つの表現を英国と米国においてどの時期に出現したかをGBNVで調べたのが図5である。GBNVが5語しか打ち込めないこと、及び whole hog or none (nothing)と打っても go (the) whole hog or none あるいは go (the) whole hog or nothing が含まれて表示されるため、それぞれのグラフ線の右に示された文字列を打ち込んだ。青線が米国における(go) (the) whole hog or none, 赤線が英国におけるそれを表し、緑色が米国における(go)(the) whole hog or nothing, 橙色が英国におけるそれを示している。

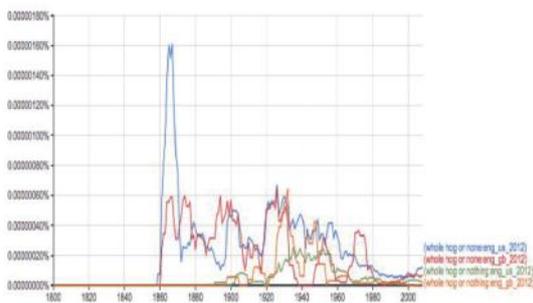


図5 whole hog or none (nothing)の英米の比較と推移

「全てか無か」という意味で the whole hog (全て, 全体)の反意語 (nothing)を後に伴っている。動詞 go を付けて「徹底的にやるかやらないか」を表す。図5から読み取れることは、(go) (the) whole hog or none は1860

年ころから、(go) (the) whole hog or nothing は1890年ころから出現している。英国と米国でどちらが先に出現したかという点については、米国がやや先行しているように看取できるが、その根拠となる文献は見つからなかった。

4-2 whole hog の変種

go the whole hog の whole が他の単語に変化する場合がある。英国のノーベル文学賞受賞作家 Harold Pinter による戯曲 *The Homecoming* に次のような場面がある。

(13) Joey: I've been **the whole hog** plenty of times. Sometimes...you can be happy...and not **go the whole hog**. Now and again...you can be happy...without **going any hog**^[32].

「おれはいままでとことんまでやったことはしょっちゅうある。でも時には.....幸せになれるんだ.....とことんまでやらないでも。時折は.....しあわせになれるんだ.....何もやらないでも。[33]」男女の性的関係の程度を, whole を変化させて表している。最初の the whole hog は名詞である。

また, hog の婉曲語として1933年に米国で発行された書籍に animal が使われている。以下にその文を示す。

(14) The dance was all life. They spin round—they set to—they heel and toe—they double shuffle—they weed corn—they kiver taters. They whoop and stop. “Now, Dick,” says Sal, “didn’t I go my death?” “Yes, you did, Sal. But didn’t I **go the whole animal**?” “Yes you did, Dick. You are the yallerest flower of the forest”^[34].

「自分は死ぬほど踊っていたでしょう」と問いかける相手に対して「こちらも徹底的

に踊りましたよね」と問い返している場面である。

この表現がいつごろ出現したか、また米国語法なのかどうかを確認するためにGBNVを使ってグラフ表示した。

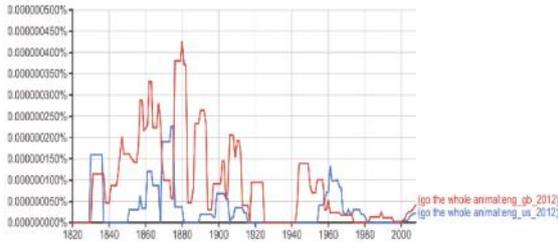


図6 go the whole animal の英米の比較と推移

この図から英国(赤線)と米国(青線)ほぼ同時に whole animal が 1830 年ころから書籍に現れたことがはっきりと分かる。これは go the whole hog 出現の時期とほぼ重なる。やはり hog という単語に抵抗感があったからだと推測される。なお、A Dictionary of Slang and Unconventional English はこの表現を米国語法 (a US phrase) と記述している^[35]。

5 考察

GBNV はかなり正確に慣用句の発祥から変化の歴史を表示できることを 2 章の「調査方法」で確認してから開始した go the whole hog の調査であったが、get the hang of it と同様にグラフ上では明確にできないため、大規模コーパス誕生以前と同様に文献に頼る結果となった。しかし、OED における初例が米国の文献であること、それ以前に米国の文献で使用されていたこと、英国の文献においてこの慣用句が米国で使われているという記述が見られることを総合的に判断して、go the whole hog が米国起源であることはほぼ間違いがないであろう。その後間もなく英国で使われ出し、図 4 から読み取れるように、英国では現在も比較

的高い頻度で使用されている。

一方米国においては図 4 のグラフ上では、1920 年ころから定冠詞の消失が始まり、現在は定冠詞が付く形と、付かない形が共存している。慣用句の定冠詞の消失はその他に in the light of (～を考慮して) があり、*Harry Potter* においても全編で in the light of が 2 箇所、in light of が 1 箇所使われている。しかし、米国版では全て in light of に統一されている点で go (the) whole hog とは対照的である。

さらに、今回の調査で明らかになったこととして 定冠詞の付かない go whole hog が文献から 1820 年代、あるいは 1830 年代にすでに話し言葉で使用されていた可能性が高いことである。慣用句は活字になるまで話し言葉で一定期間使われていたことは容易に想像できるが、このケースでは 100 年近い間、そうした状態にあったことになる。GBNV は年間の書籍に使用された回数が 40 回以下の場合にはグラフに表示されないことを考慮すると^[36]、数少ないながらもこの 100 年間、継続的に活字に表されていた可能性も否定できない。

この慣用句の変異形については、まず go (the) whole hog or none 及び go (the) whole hog or nothing の通時変化を調べた。現在の使用頻度は非常に低いが、前者が出現した 1860 年ころに歌の歌詞に使われていたことから、そのことと急激な使用頻度の上昇とがなんらかの関係がある可能性がある^[37]と推測される。例(15) は米国で 19 世紀中ごろ歌われた歌詞の一部で、曲名は *Whole Hog or None* である^[37]。

- (15) The people all act so strangely and so very funny,
Everybody's bound to **go the whole hog or none**.
Why is it that our ladies

Are deep in husband's books,
With such tremendous hoops?
And if their husbands do complain,
She quick to him will run-----
“My dear,” says she, “You know I go
‘**The whole hog or none.**’”

また, hog が変化した the whole animal も、現在は廃語寸前であるが、1880 年を中心に比較的高い頻度で英国において使用されていたことが分かった。さらに 1916 年に Charles Dickens が *Nicholas Nickleby* において whole を変化させて go the extreme animal という表現を使用した^[38]。しかしこれは一般に広まることなく、GBNV で検索してもグラフ表示されなかった。

以上、慣用句 go (the) whole hog の変遷に関しコーパスを基礎にしながら、文献を調べることによって調査してきた。再度その変化の軌跡を振り返ると、言語を生み出す人間は、言語を創造的に変化させる生き物であると言えるが、それと同時に生み出した言語を「気まぐれ」に変化させているとも言えよう。Ammer (2013) はこの現象を E.B.White の言葉を引用して次のように表現している^[39]。

“The living language is like a cowpath; it is a creation of the cows themselves, who have created it, follow it or depart from it according to their whims or their needs.”

言語の変化を、自ら通り道を作っておきながら気分次第で、あるいは必要に応じて道を辿ったりする牛の動きに例えている。言い得て妙である。今後、この慣用句がどのように変化していくのか注目したい。

使用したオンライン・コーパス

Davies, Mark. (2010) “Corpus of Historical American English (COHA)”

<<http://corpus.byu.edu/coha/>>

(2015 年 7 月 14 日最終アクセス)

Google Books Ngram Viewer. (2013)

<<https://books.google.com/ngrams>>

(2015 年 7 月 14 日最終アクセス)

参考文献

- [1]松田裕(1987) 『米語のインパクト—当てにならない辞書の標示—』大修館書店, pp.15-20, pp.193-217。
- [2]Uchida, Mitsumi. (2014) “*At the End of the Day: Detecting Semantic Shift of a Multi-word Adverbial in Corpora*” in Yoko Iyeyri, and Jennifer Smith(eds.), *Studies in Middle and Modern English: Historical Change*. Osaka Books Ltd, Osaka: pp.95-113.
- [3]「コーパスを活用した英語慣用句の通時的研究—before you can say Jack Robinson を中心に—」『北海道情報大学紀要』第 26 巻, 第 2 号, 平成 27 年 3 月, pp. 15-32。
- [4]Google Books Ngram Viewer
<<https://books.google.com/ngrams/info>>
(Accessed on July 14th, 2015)
- [5]高橋作太郎・笠原守・東信行(編)(2012) 『リーダーズ英和辞典』第 3 版 研究社, p.2671。
- [6] Oxford English Dictionary, 2nd ed, Version 4.0. (CD-ROM)
- [7] Patterson, Paul. (2012) *Playfair Papers*, General Books. 【復刻版】
- [8] Carlos G. Valles. (2010) *The Art of Choosing*, New York, NY: Crown Publishing Group, p.144
- [9] Rowling, J. K. (2007) *Harry Potter and the Deathly Hallows*, Bungay, Suffolk: Bloomsbury, p.356.

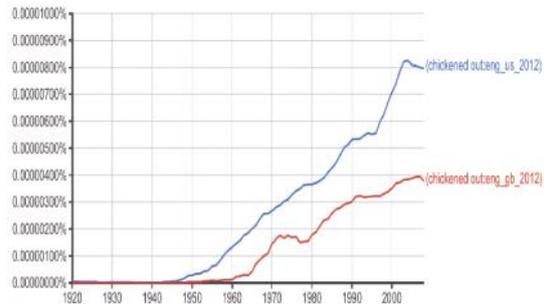
- [10] The Guardian. Nicholson, Bob. *Racy Yankee slang has long invaded our language*, (Issued on October 8th, 2010) <<http://www.theguardian.com/commentisfree/2010/oct/08/chillax-emma-thompson-slang-english-language>>
- [11] Curtis T. George (1870) *Life of Daniel Webster*, New York, NY: D. Appeton and Company. Vol.1. <<http://babel.hathitrust.org/cgi/pt/search?q1=go%20the%20whole%20hog;id=uva.x004615985;view=1up;seq=9;start=1;sz=10;page=search;orient=0.>> (Accessed on June 19th, 2015)
- [12] Davies, Mark. (2010) “Corpus of Historical American English (COHA)” <<http://corpus.byu.edu/coha/>> (Accessed on July 14th, 2015)
- [13] Woodworth, Samuel. (1823) *Epilogue, to Cox's Opera of Rokeby Spoken by Barnes, Placide, and Hilson*.
- [14] The Cabinet of Instruction, Literature, and Amusement. (1829) Vol.1. New York: Theodore Burling. p.747. Hathi Trust Digital Library <<http://babel.hathitrust.org/cgi/pt/search?q1=going+the+whole+hog&id=njp.32101077277315&view=1up&seq=8>> (Accessed on June 19th, 2015)
- [15] Hamilton, Thomas. (1833) *Men and Manners in America*, Edinburgh; London: W. Blackwood. p.11. University of Alberta Libraries <https://ia700400.us.archive.org/29/items/cihm_25700/cihm_25700.pdf> (Accessed on June 19th, 2015)
- [16] Letter from George Simson to Christian Ramsay (1836) University of St Andrews <<https://pacific.st-andrews.ac.uk/Dserve/dserve.exe?dsqIni=Dserve.ini&dsqApp=Archive&dsqCmd=Show.tcl&dsqDb=Catalog&dsqPos=1&dsqSearch=%28%28%28text%29%3D%27go%27%29AND%28%28text%29%3D%27the%27%29AND%28%28text%29%3D%27whole%27%29AND%28%28text%29%3D%27hog%27%29%29>> (Accessed on June 19th, 2015)
- [17] Flexner, Stuart B. (1982) *Listening to America*, New York: Simon & Schuster, Inc. p.12.
- [18] Thomas, Lately. (1967) *Delmonico's: A History of Splendor*, Boston: Houghton Mifflin Company. p.9.
- [19] Patterson, Paul. (1841) *The Playfair Papers, or Brother Jonathan, the Smartest Nation in All Creation*. Vol.2. London: Saunders and Otley, Conduit Street. p.291.
- [20] *ibid.* p.295
- [21] Rowling, J. K. (2007) *Harry Potter and the Deathly Hallows*, New York: Arthur A. Levine Books. p.225.
- [22] 高橋作太郎・笠原守・東信行(編)(2012)『リーダーズ英和辞典』第3版 研究社, p. 2671。
- [23] 小西友七・安井稔・國廣哲彌・堀内克明(編)(1994)『小学館ランダムハウス英和大辞典』第二版 小学館, p.3109。
- [24] Macmillan English Dictionary. (2007) 2nd ed, Oxford: Macmillian Education. p.719.
- [25] Longman Dictionary of Contemporary English. (2012) 5th ed, Essex: Pearson. p.2002.
- [26] The American Heritage Dictionary of Idioms. (2013) Boston: Houghton Mifflin Harcourt. p. 188.
- [27] Cambridge Dictionary of American Idioms. (2010) 5th ed, Cambridge: Cambridge University Press. p.187.
- [28] Hotten, J.C.(1870) *The Slang Dictionary*;

Or, The Vulgar Words, Street Phrases, and "fast" Expressions of High and Low Society, Many with Their Etymology and a Few with The History Traced, London: John Camden Hotten, Picadilly. p155.

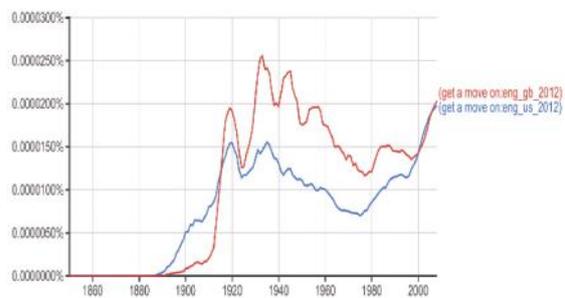
- [29] 小西友七・安井稔・國廣哲彌・堀内克明(編)(1994)『小学館ランダムハウス英和大辞典』第二版 小学館, p.3109。
- [30] Jones, Ramona. (2006) *From Tongue, to Ear, to Heart: So Says the Wise*, Raleigh, NC: Lulu.com. p.178.
- [31] White Song Eagle (2008) *Teluke: A Big Foot Account of Interaction with an Older Race of Spiritual Beings*, Bloomington, IN: Author House. p.71.
- [32] Pinter, Harold. (1991) *The Homecoming*, Croydon, UK: CPI Group (UK) Ltd. p.111.
- [33] ピンター, ハロルド(1977) 喜志哲雄・小田島雄志・沼澤治治 訳「帰郷」『ハロルド・ピンター全集 2』新潮社, p.258。
- [34] Crocket, Davy. (1833) *The Life and Adventures of Colonel David Crocket*, Cincinnati: Published for the Proprietor. p.35.
- [35] Partridge, Eric. (2006) *A Dictionary of Unconventional English*: Routledge, p.21
- [36] Google Books Ngram Viewer
 <<https://books.google.com/ngrams/info>>
 (Accessed on July 14th, 2015)
- [37] Pastor, Tony. (1862) *Tony Pastor's Comic Songster*, New York: Dick & Fitzgerald Publishers. p.27.
- [38] Dickens, Charles. (2000) *The Life and Adventures of Nicholas Nickleby*, Hertfordshire: Wordsworth Editions Limited. p.22.
- [39] Ammer, Christine. (2013) *The American Heritage Dictionary of Idioms*, Boston: Houghton Mifflin Harcourt. n.pag.

資料 (青線は全て米国を, 赤線は英国のグラフ線を表す。)

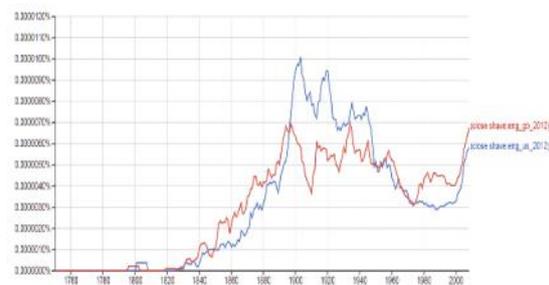
② chicken out



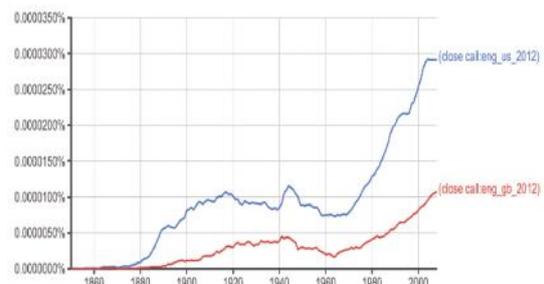
③ get a move on



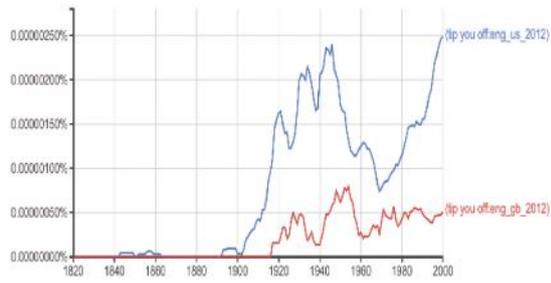
④ close shave



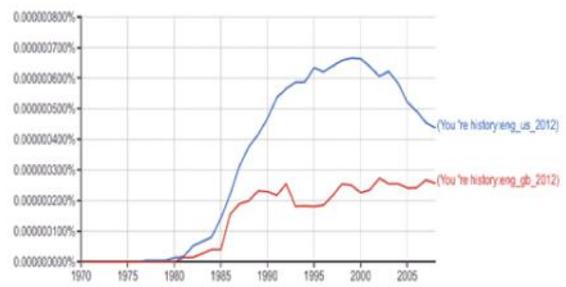
⑤ close call



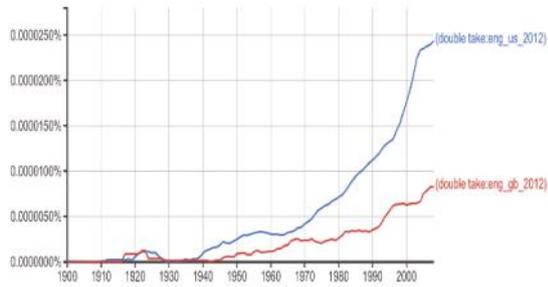
⑥ tip (you) off



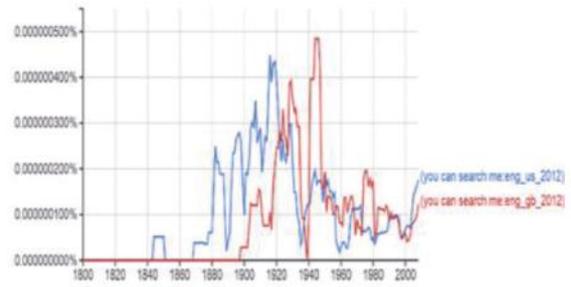
⑫ You're history



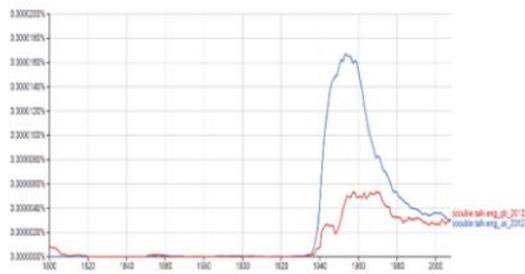
⑧ double take



⑬ you can search me



⑨ double talk



⑪ spill the beans

